

# 社会的問題を持つ母親への育児支援 —看護介入と地域との連携を振り返って—

キーワード：社会的問題、育児支援、地域との連携、看護師の役割  
北2階病棟 ○垣副京子、本田しのぶ、太田純代

## I. はじめに

A病院未熟児室には、社会的問題を持った母親を持つ児が年間6例程度入院してくる。親になる自覚の低さからの育児準備不足、経済的問題から住居や育児環境が整えられず、育児指導が進まない場合がある。また、未熟児室に入院する新生児は必ず母子分離となり、母子分離になると愛着形成が阻害され、幼児虐待のリスクが高くなる<sup>1)</sup>。私たちは、出生児の看護を行いながら、子供の虐待予防に繋がるように早期より母子の接触を図り、愛着形成を促進していく必要がある。親が社会・経済的問題を抱えている場合、入院中のケアだけでなく退院後のサポートも必要となるケースが多い。そのため、早期に問題を抽出し、病院から地域に情報を発信し連携を図る必要がある。

今回、社会・経済的問題を持った母子に対して入院直後より介入を行った事例を振り返り、育児支援と地域との連携について検討したので報告する。

## II. 研究方法

1. 研究デザイン：質的記述研究
2. 研究期間：平成22年5月～6月
3. 研究方法：診療録、看護記録、産科・小児科・保健師合同カンファレンス記録、保健師訪問記録より情報収集を行い、看護介入及び地域との連携について分析・検討した。
4. 倫理的配慮：研究の目的を説明し了承を得た。個人が特定されないように匿名とした。

## III. 事例紹介

母親は20歳代、初産であった。30歳代のパートナーと1Kのアパートで同居しているが入籍の予定はない。お互いの家族背景も複雑で

あり、実父母にも妊娠・出産の報告が出来ない状況である。妊娠36週まではクリニックで妊婦健診を受けていたが、分娩病院を探そうとせず、妊娠39週2日に陣痛発来しA病院で飛び込み分娩となる。児は2060gと低出生体重児であり、経過観察のためにA病院未熟児室に入院となる。母親の既往歴はうつ病、睡眠障害がある。経済的にはパートナーの収入だけで生活をしており、育児用品も揃えていなかった。

## IV. 入院中の経過及び看護介入とその結果

上記の母子の状況から、①愛着形成阻害の可能性②虐待・育児放棄の可能性③育児環境の未整備④経済的問題⑤受診行動が取れない可能性といった問題が考えられた。これらに対する看護介入として、母子の愛着形成の促進と育児指導、入院初期から退院後の育児を考慮したソーシャルサポートを行った。

### 1. 未熟児室入院期間

出生当日から母子の面会を行い、タッチングを促したが母親は保育器に手を入れる事が出来なかった為、看護師が手を取り一緒にタッチングを行った。その後母親は徐々に児に触れる事にも慣れ、時折笑顔が見られるようになったが、母親自ら児に声をかける事は無かった。看護師がおむつ交換や哺乳瓶による授乳を指導し促せば実施する事は出来るようになった。児は2生日目にコットに移床し、直接授乳を開始した。授乳に関しては児が吸啜を止めると母親はどうしたら良いかわからず、じっと抱いているといった状態だったため見守りが必要であった。3生日目には沐浴指導を行い、看護師の見守りの下で沐浴を行った。母親は、産褥5日目に退院となった。その後は毎日面会に来て、沐浴と直接授乳を行なった。母親はオムツ交換

や母乳を飲ませるタイミングを計る事が困難であった。パートナーの父親が倒れたことで、情緒不安定な状態となった時期もあったが、母親から児に対して「かわいい」という言葉が聞かれるようになり、愛着が形成されつつあることがわかった。

母親が児の生活リズムをつかみ、育児のイメージができるようになるために母親とパートナーへ母子同室を行うことを提案した。了承が得られたため、2泊3日で母子同室を行った。

## 2. 母子同室期間

母子同室1日目(22 生日)に、育児に必要な物品を持参してもらい、物品が揃っているか確認した。母子同室開始後母親は煙草を吸うためにたびたび外出する事があった。児は哺乳に時間がかかり、母親はなかなか入眠出来ないといった状況であった。

母子同室2日目(23 生日)、母親は明け方にやっと入眠するといった状況で、「眠い、起きれない。」といった発言があり、ミルク哺乳の途中で児と共に眠ってしまうという行動が見られた。1つ1つの育児技術に関しては上手に出来るようになった。

母子同室3日目(24 生日)、母親は児の啼泣の理由が分からず戸惑い、疲労感もあったが、児を抱いてあやしたり、声をかけたり、添い寝をするとといった行動がみられた。病棟に保健師の訪問があり話し合った結果、退院を決定した。

## 3. 地域との連携

入院早期から医療機関と地域の連携を図り、合計5回の話し合いを行なった。話し合いは、本人・パートナー・MSW・保健師・家庭相談員・産科病棟師長・助産師・主治医・小児病棟師長・未熟児室係長と未熟児室看護師でおこなった。

2 回目(4 生日)の話し合いでは情報交換と今後の方針を検討し、保健師が児の退院前に家庭訪問を行うことになった。保健師が家庭訪問時、育児物品は全く準備されていなかったため必要物品の説明と喫煙・飲酒・パチンコ等について指導が行われた。

3 回目(15 生日)の話し合いでは、母親が児の生活リズムをつかみ、育児のイメージができること、医療者側は母親の育児能力を評価することを目的として母子同室を行うことを提案した。母子同室期間中に保健師が来院し、現状を確認した。話し合った結果、保健師が退院後早期に訪問をすることを取り決めた。友人の支援も得られ、退院後の母子のサポートと観察が行えることとなったため退院を決定した。退院後翌日から保健師と家庭相談員が定期的に訪問し、母子の状況を観察した。

## V. 考察

Klaus&Kennel は出産後の早期の接触が母親の愛着の感受期となることを検証している<sup>2)</sup>。今回の事例も出生当日から母子の面会を行い、母親と児の接触を早期に行った。最初は声かけやタッチングも行えなかったが、母親の手を取って児に触れさせたり、児の様子を詳しく説明したことは母親が児を受け入れることにつながった。愛着を言葉では表現できなかったが、毎日お金を工面して面会に来ていたことは愛着形成の表れだと考えられる。早期からタッチングやおむつ交換、哺乳・沐浴などの指導を行い母親自身が育児技術に参加出来る様に促したことは、母子の愛着形成を築く上で重要であった。

今回、2泊3日で母子同室を行った。母親とパートナーへ母子同室の目的を説明し、実際に同室を経験したことは退院後の生活のイメージにつながったと考える。医療者側は母親の育児能力と母親自身の生活リズムのコントロールが行えるかを評価する目的を持っていた。育児技術に関しては一通り行うことができることを確認した。母子同室を行ったことにより、児の生活リズムに合わせようと努力する母親の様子が見られた。児の反応を捉えて行動する努力は行っていたが、行動にムラがあるため経過観察の必要性が明確になった。保健師もその状況を目の当たりにしたため地域での支援の

必要性を感じていた。これらのことが明確になり、母子同室を行ったことは地域につなげるための一つの手段としても有効であった。

この事例は、虐待増悪因子<sup>1)</sup>である母子分離や経済的困難などの因子が重なっていた為、退院後の社会的な支援の必要性を視野に入れ、入院直後より他部門との連携を行った。早期から連携を図っていたため児が退院する前に家庭訪問を行い、育児準備状況を確認することができた。保健師が母子同室の状況を直接観察することで退院後の継続した地域支援の必要性をより強めた。退院後、母親の精神状態が不安定となる可能性や育児放棄のリスクが高いと考えられた為、早期より退院後の生活を見据えて地域と連携を図った事は母子にとって有効であった。

今回行った地域との連携は、医療機関内では、産科・小児科・MSWが早期から情報交換を行い、母親と児を支援した。産科からMSWを通して保健センターに情報提供を行い、その後保健センターから児童相談所や民生委員等に連携が広がった。(図1) 家族背景の多様化や様々な要因により育児支援の形も多様になっている。ケースに応じてネットワークが早期に活動できるようなシステム作りが必要である。

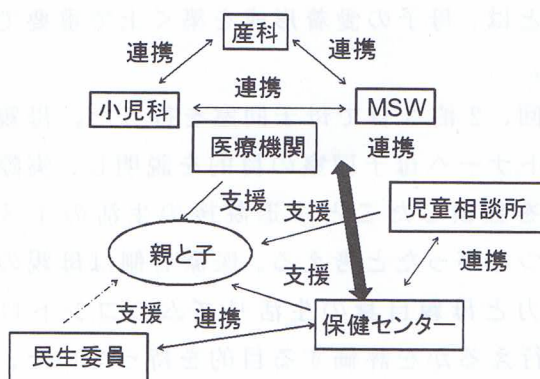


図1. 今回の母子のネットワーク

## VI. 結論

1. 早期から母子の接触を図り、育児支援を開始したことは愛着形成につながった。
2. 母子同室を行ったことは育児能力の評価に有効であった。

3. 入院早期から医療機関と地域が連携を図ることは効果的な継続支援につながる。

## VII. 終わりに

医療機関と地域がお互いの専門性を発揮することが円滑な母子の支援につながると考える。今後も社会的な問題を持つ母子に対して、地域と密な連携を図り、効果的な育児支援を行っていききたい。

### 【引用文献】

- 1) 福井美保他：虐待ハイリスクの退院に向けての準備一チーム・アプローチの方法一日本未熟児新生児学会雑誌，第19巻第1号，p128～130，2007
- 2) 阿喰みよ子：未熟児の母親がもつ子どもへの認識と受容的感情についての調査研究名古屋大学教育学部紀要・教育心理学科，44，p223～224，1995

### 【参考文献】

- 1) 野村真二他：地域の保健師との連携によるNICU退院時の育児支援一アンケート結果と今後の課題一広島医学，57巻6号，p556～560，2004
- 2) 伊藤直美他：統合失調症の母親への育児支援一地域との連携を通して行った援助を振り返って一小児看護，第36回，p15～17，2005
- 3) 長濱輝代他：NICUにおける母子関係の検討一アンケート調査にみる危機的側面の分析一生活科学研究誌，VOL.5，p1～9，2006